山口寒水

その人と作品

真下四郎

みやま文庫

山口寒水

その人と作品

みやま文庫

会　　長　清水一郎（群馬県知事）
副会長　山川武正（群馬県教育長）
運営委員長　田中源太郎（群馬県議会議員）
編集委員長　相葉　伸（学識経験者）

山口寒水—その人と作品—　（みやま文庫 65）

昭和52年3月20日印刷
昭和52年3月30日発行
会員頒布（会費年間2,600円）

執筆者　真下四郎
発行者代表　田中源太郎
印刷者　朝日印刷工業株式会社

発行所　みやま文庫
〒371　前橋市城東町二丁目3～3
群馬県立図書館内

昭和51年度第4回配本

「山口寒水」に寄せる

萩原　進

去る日、著者の真下四郎さんから電話で、山口寒水の伝記と作品集をまとめてみたいという話があった。真下さんは学校時代寄宿舎で同じ室だったという四十数年間の知友の一人である。

校長を最後に閑暇を得たのでこの際何かまとめて見たいとのことであった。同じ地方史に携ってきた同学の士である。きっと立派な著作になることだろうと期待していたが、一月二十八日県史編さん室に分厚い原稿を抱えて見えられた。もう脱稿したとのことである。

その入魂の原稿を拝見させてもらい、従来断片的に研究されてきた山口寒水を、郷里を同じくし、しかも地方史家としての確かな眼をもつ有利な条件を活かし、細部に亘って追求している努力に敬服した。山口寒水の評伝としてはおそらく定本の一つに

なるであろう。

寒水が世に出るまでの経緯は本文に詳しく書かれているので蛇足は省くことにするが、寒水は僅か二十歳そこそこで夭折した平凡の一人の明治の文学青年ではなかったことを証するものは、田山花袋の言によって明らかである。

本書はその天才的ともいうべき青年の伝記を究明しながら、常に時代背景を考覈(こうかく)しつつ渋川市石原の出身である寒水を広い視野から世に出そうとする熱意がそうさせたのかも知れない。

実は、私も機会があれば寒水の評伝をものし、埋もれていた青年作家をもっと世間に知ってもらおうと思っていたが、なかなかその機会がなく現在に至ってしまった。その私の念願を真下さんが果して呉れた喜びは大きい。

しかも、間接的にしか寒水の郷土を知らない私のマイナスをみごと充足している。最初に見出した一人としてほんとに有難いと思っている。

ことに、全作品を網羅されて後半に一括収録されていることは、今後の寒水研究に大きな資料となるであろう。その意味でも要を得た労作である。

図書館人として半生を終えた私は、文学の領域ぐらい多くの支持者を持つ分野はないことを知ったが、寒水の如きは前途有為の青春を残して世を去った人物だけに、年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

令を超えて共鳴者が出るはずだと思っている。この一冊がその誘い水となることを信じている。

亡くなられた本多夏彦翁が、生前よく「伝記は成長する」と言っておられた。死者はその死の瞬間がストップで成長はあり得ない。

しかし、偉大なる人物は必ずしも兼好法師が徒然草に述懐したように「去る者は日々に疎し」ではなく、年を経るごとにその人間研究が加えられ、成長してゆくものなのである。この山口寒水評伝も正しく成長してゆく伝記の好例といっても言い過ぎではあるまい。

最後に著者の筆労をねぎらい、立派な一冊が世に送られる祝意を述べてなくもがなの駄文を書かせてもらった。

著者の意を十分に伝えられない一文であるが、需められるまま巻頭を飾らせて戴いた。

昭和五十二年一月三十日

はじめに

真下四郎

郷土出身の作家、山口寒水、といっても本県内でも知っている人は、あまり居ないであろう。寒水は、明治の一時期には全国的にもその名を知られ、田山花袋らと共に、流行作家といわれたこともある。しかし、何といっても二十才の若さで亡くなったので、その後殆どその人も作品も忘れ去られてしまった。

戦後の昭和二十七年、偶然にも、萩原進先生が、田山花袋の紀行文集の中から、その存在を発見したのである。

その後、萩原進先生、前橋工業短大教授の市川為雄先生、日本キリスト教団渋川教会の故栗原陽太郎牧師らによって、その人と作品の発掘・研究が進められて来た。

私も、その初期においてこれらの先生方の後について、生家を訪れたり、墓参りをしたり、また、これらの先生方の寒水に関する講話を聴き、発表されたものを読みなどしたのである。

しかし、その後多忙を口実に遠ざかっていたが、今回、時間的に余裕ができたので、寒水研究に取り組もうと考え、萩原先生に相談したら、「地元はもっと寒水の顕彰を考えるべきだ。」というような意味のことを申され、私を激励して下さった。

私にその力があるかということになると疑問であるが、私は寒水と同郷の者、地元の利を生かして、寒水の人間研究の資料を集めたりすることはできるのではないかと思い、勇を鼓して取りかかったのである。

そして、寒水の作品や資料等の蒐集と写真撮影には、渋川市立浅野記念図書館の平沢文夫館長に大変ご協力いただき、また萩原先生、市川先生、栗原氏らの発表されたものを、参考にさせてもらいなどしてまとめたのである。

それからまた、寒水の作品の殆どがのっている「横野乃華」をご貸与下さった、赤城村持柏木の藤川栄一氏や、寒水関係の遺品をお見せ下さった、渋川市石原の山口正夫氏にも大変お世話になっている。

現在手にはいる寒水関係のものは、全部拙稿に集録したつもりである。これからは、郷土の偉大な作家、山口寒水を現在以上に顕彰するのにはどうしたらよいか、皆さんと共に考えて行きたいと思う。

凡　例

1　作品に使用されている漢字、仮名振り、送り仮名などはそのままだが、特にわかりにくいものだけ、現代風に改めたのもある。

2　人名の、故人には敬称を略した。

3　「横野乃華」「小学世界」等に発表された全作品を発表、年次の順に収録した。

4　作品の一つ一つに作者名を記す必要はないのだが、特に変った雅号を用いてある場合だけ、そのまま記した。

目　次

「山口寒水」に寄せる　萩原　進
はじめに　真下四郎
一、寒水の発見について……三
二、生　涯……一七
(一)　生い立ち……一七
(二)　活　動……二六
(三)　その死……三八
三、寒水の遺品と生家……四六
(一)　観音画像の掛軸……四六
(二)　肖像画の掛軸……四七
(三)　友人知己よりの手紙……四九

(四) 生　家……四九
(五) 墓……五〇
四、当時の社会思潮と寒水……五三
五、当時の文学思潮と寒水……五六
六、「横野乃華」と寒水……六三
参考文献
山口寒水作品一覧……六七
作　品
故山去……七一
巡査……九三
小学校教員……九五
猪学生……九六
火事……九八
自然の美……九九
雲霞茫々……一〇一
でか仏……一三一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

孤児……二六
氷採人夫……二九
春新禧……二八
青年諸氏に望む……一四〇
国旗の歴史……一五一
大運動会……一五七
桑一枝……一六二
自然……二一七
新聞社の内幕……二二〇
瓢堂と蒼波……二二七
紫波藤川詞兄へ……二三〇
筐の時計……二三二
宇宙の美観……二三七

跋　市川為雄

山口寒水　その人と作品

一、寒水の発見について

寒水を発見するという表現は、ちょっとおかしく感じるであろう。

しかし、明治三十七年六月二十八日に、二十才三ヶ月の若さで亡くなった寒水は、その後すっかりその人も作品も、世に忘れられていたのである。それを、郷土史研究家、萩原進氏が、昭和二十七年六月偶然、その存在を知り、その人と作品の調査研究に着手され、すばらしさに驚き、世に紹介されたのだから、発見といってもよいであろう。明治・大正時代はいざ知らず、昭和になってからは、中央文壇においても、また郷里においても、全く寒水の名を、或は作品のことを口にする人はいなかったのである。

では、どのような経緯から寒水が発見されたかを、かいつまんで述べてみる。

萩原氏は、昭和二十七年六月のある日、わが群馬の生んだ文豪で自然主義文学の生みの親といわれる、田山花袋の「花袋紀行集」を読んでいた。そうしたところ中に、「香山遊記」という作品があった。

香山とは伊香保のことである。

この「香山遊記」は寒水の一周忌に、文学の師の江見水蔭や、兄弟子（あにでし）の田山花袋らが墓参をし、その夜、伊香保に泊って寒水追慕文学会を開いた時の紀行文である。それまで、萩原氏も、この寒水についてはその名前さえ知らなかったそうである。

一大発見と胸おどらせた萩原氏は、早速「香山遊記」の中の、渋川在という地名を頼りに、寒水の生家の所在を渋川町役場その他にたずね歩いたのであるがわからなかった。最後にかねて知り合いの、町の長老であり郷土史などにくわしい後藤善十郎を、渋川町中之町に尋ねたところ、おぼろげながらのその記憶に、

「石原にそのような人がいたようだ」というのであった。

ようやく萩原氏は寒水の生家を尋ねあて、寒水の甥、山口清太夫と会い、その語るところを聞き、寒水関係の遺品を見せてもらい、墓参をして帰ったというのである。それから萩原氏の寒水の調査、研究が始まったわけであるが、残された原稿もなく、作品もなかなか見つからなかった。

それでも、東京大学の明治新聞雑誌文庫から、秀英社発行の「小学世界」にのっていた、寒水作の三篇を見つけ出した。これらのことを、新聞雑誌や講演などで発表されたところ、大きな反響があったのである。

文学評論家で前橋工業短大の市川為雄教授も、萩原氏の講演を聞き、強く寒水に興味を持たれたとのことである。そして、作品を萩原氏と共に探していたところ、昭和三十三年春、赤城村宮田の人で、これも郷土史研究家だった、角田恵重翁が、人を通じて市川教授に寒水の作品の所在を教えてくれたのである。

今は同じ赤城村になっているが、町村合併以前は横野村といっていた村があり、その一部落に持柏木というところがある。そこの青年会が、寒水の活躍していた頃「横野乃華」という雑誌を出していて、それに寒水の作品がたくさんのっているというのである。角田翁は、この「横野乃華」の有力な後援者で、毎号のように郷土史に関する記事や論説を掲載しており、山口寒水の名も知っていたようである。

大いに喜んだ市川教授は、早速のこと、この雑誌の編集指導者であり後援者であった、藤川恒六（元三原田小学校長）の子、喜道の宅を訪れ、もはや同家と先年亡くなった北橘村の今井善一郎家にしか残っていないという「横野乃華」全三十巻をお借りすることができたのである。ここで数年来の望みを達し、寒水の作品を読むことができたわけである。

寒水は、この外にも当時高崎にあった新聞社「坂東日報」や、島根県・長野県や横浜・神戸などの新聞雑誌に短篇小説の類を寄稿しているようである。しかし、それらの作品は未だ発見されていない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com